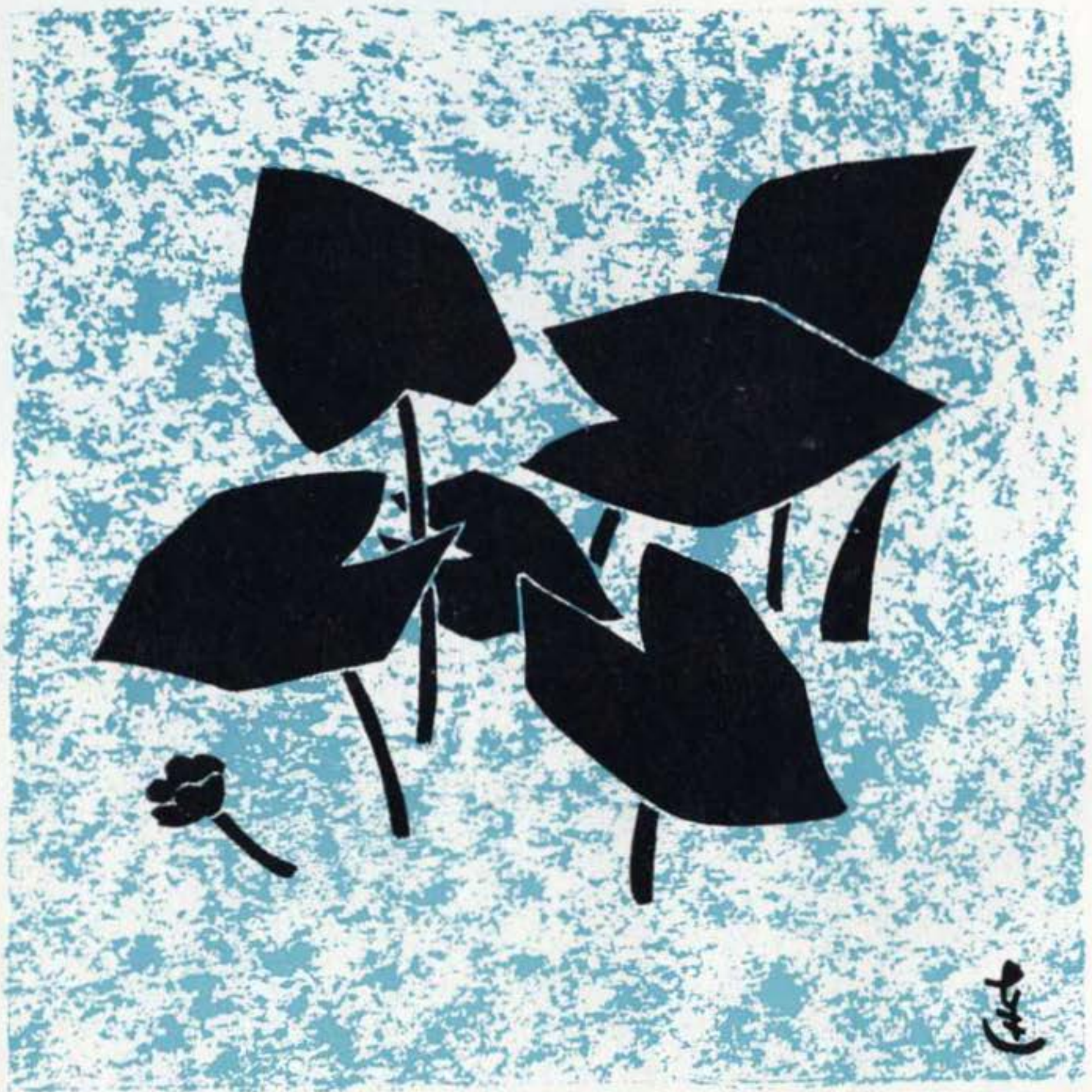


浄土

六月号



法然上人鑽仰会

昭和十一年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 通輸省 (特別扱承認雜誌第三五二号)
昭和四十一年五月二十五日 印刷 昭和四十一年六月一日 発行

第三十二卷 第六号



変化のほとけ

千手観音

大阪 葛井寺（剛琳寺）

千手観音とひとは呼びならわしてきた、このみ仏は正しくは千手千眼観音という。手よりも眼に主眼がおかれていたことが忘れられようとしている。観自在と呼び、観世音とも称する観音は観ることに意味がある。音を聴くのではない。やはり音をも観、あらゆる苦痛をも見すえる眼の持ち主である。とすればその眼によって救いの手が差しのべられることになる。持物を持たない掌に眼が画かれていた初期の千手観音の意味もおのずと判ることであろう。み仏に見守られている私という存在、永遠のいのちに連がる私をもっとも身近かで知らせてくれる千手観音のみ手にすべてを托すことができる、天平の人びとも考えていたのであろうか。

千手観音のなかでは現存する最古のこの仏像は、端麗な顔と均勢のとれた姿とでとくによく知られている。脱乾漆造りであるためか、圧倒されそうな千手を背景にしているこのみ仏が、実に軽やかに感じられる。合掌している両手のなんとまろやかなことであろう。一メートルに足りないけれど光背のような多くの手によって、大らかに受とられるすばらしい像である。

（石上 善応）



聖道は機縁浅薄にして、
浄土は機縁深厚なり。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙「コウホネ」松濤達文画

随想	鈴木成元・三浦純亭・福島昭男	(2)
法然上人を讃仰する	寺内 大吉	(4)
特集 創立三十周年京都大会		(8)
不請の友 かけがいのない「浄土」	角野 達堂	(12)
— . — . — . — . —		
念仏生活に音楽を	安居 香山	(15)
お経の話 現世の修善こそ尊し	村瀬 秀雄	(16)
伝 道	田中 祥雄	(19)
読者の便り 私にも不動心があった	上田 純明	(20)
— . — . — . — . —		
信仰へのみちびき	宮林 昭彦	(22)
現代語訳 歎仏偈	吉田 定久	(23)
家康と三河一揆	鶴田 湛泉	(24)
無媒随録	須藤 隆仙	(27)
ご法語をいただく		(31)
信仰の手引 罪とがを除いて幸福を得る徳		(32)
連載 話 みんなの法然さま・靈感奇瑞のこと	高橋 良和	(28)

サルとエレキ

鈴木 成元

新緑の季節をすぎると間もなく夏。うすぐらいホールでエレキに合せ、モンキー・ダンスを踊っていたティーンエージャーは屋外に場を求める。この方が健康的。しかし、あの電撃音の響きには閉口。

昨年の秋ごろ、上野の猿山でエレキ実験した記事が『朝日新聞』にのった。ギター三つとベース一つを二つのアンプにつなぎ、ドラムをセットしている間、物見高いサルどもはズラリと並んで開演持ち。スイッチが入られ騒音が響き渡ると、サルどもは一せいにとんで逃げた。と思った次の瞬間、山の頂にかけるのぼった中サルが踊り出した。ぬけるような青空をバックに、身をかがめては、とび、また身をかがめては、とぶ……。

他の一匹は、サルすべりの幹にとびつき激しく揺さぶった。こうして山は興奮状態のウズと化した。わが子を胸に、思わず粗そうを

新茶の香りと古茶の味

三浦 純亭

曰頃コーヒー、紅茶党の人々でも「新茶でました」と茶輔の店頭のピラが薫風になびくさまは目にも嬉しいものであり、八十八夜に摘まれた新茶の香りは失われつつある民族意識を取り戻してくれる感があります。江戸時代新茶は「御物お茶壺献進」と申して禁裡への献上茶と將軍家直用のお茶をお茶壺道中として東海道五十三次を練り歩いたものであり、この大行事を済まさぬ限り初荷を許されなかったと申されます。「御物御茶壺出行無之内は新茶不可出」と高札が宇治橋畔に立しられた程で製茶師はもとより宇治の里人はこの光栄あるお茶壺献進は大変な緊張さでその行事の無事を念願して道中筋の諸大名も道中の警固、送迎に非常な神経をつかったと申します。

童謡の中の

へづいづいづくろばし こまみそづい

接客

福島 昭男

私は都内のあるデパートの店員。郷里鹿兒島より上京して早や六年、どうにか都会の強大な流れの中にとけ込んだ感じがする。初めのうちは上司のいうがままに接客すること一日が過ぎ、何か物足りない日々が続いた。しかし早く一人前の商人となり、郷里に待ちわびる母を安心させようとがんばった。だがいかなる職業でもはじめは同様であろうが、初めて経験する実社会の目には見えない厚い壁が行く手をはばむようにおおいかぶさってくる。全く見当のつかない未知の世界に飛び込んだ私を待っていたのは洗練された買物上手な都会の人々であった。初めの一、二年は商品に対する知識不足も手伝って、逆にお客様から教えられるという主客転倒の場面をしばしば経験し、周囲の失笑をかったものです。こんなことで挫折してなるものかと、上司の接客態度を自分なりに解することに努めた。四

する若い母親もいたという。

人間様のモンキー・ダンスは、骨の関節の力をぬいて、いかにもだらしが無いが、モンキーの方のダンスは、速いリズムで、ピッ、ピッとしまっております、いかにも力強い。「デイゲ、デッゲ、デゲ、デゲ……」とくると、金網をゆきぶり、大車輪をくりかえし、ビョン、ビョン、ビョン。大変なさわぎという。

飼育課員の話しだと、踊りといっても興奮状態だと。人間様の方も踊りよりムードに重きをおくとか。にたようなものである。

ところが、サルどもの中でもより高級なゴリラやチンパンジーはごきげんななめ。手をたたき合せ、足を踏みならしてかみつかんばかり。あっちへ行けとばかりに排せつぶつを右手につかんでワインドアップ。

私はしばし笑いがとまらなかった。

エレキのきれいな人は古いといわれるかもしれないが、ゴリラやチンパンジーに見下げられているような気がして、よりいやになった。

へ茶壺におわれて ドッピンシャン

という一節もその当時の名残をしめすものと聞きます。この行事は寛永四年後水尾天皇の御代、徳川三代將軍家光が宇治の上林家に命じ、献上茶を謹製せしめた時に始まり、東海道五十三次のお茶壺絵巻は以後百年余りの間にわたり豪華にそして荘重な儀礼を以て行われましたが八代將軍吉宗の時代に到って奢侈禁令下にこの慣例が廃しされたと申されます。せめて今日私どもは神仏に供してから頂く事に依って造った人への感謝とともにその恵みをも喜ぶたいものです。新茶はよく製成されて有りませんためにあくまでも走りの味として少し求めた方が賢明です。古茶は内から外へと香り、味と共に楽しみ、新茶は外から内へと漂う香りをよろこび初夏のさわやかさを味います。古茶はや、多目に一合の急須の湯に小サジーバイ強入れ山吹色に出します。新茶に少目に一合の湯に小サジカルクーバイ入れ薄緑色に出すのが敵切です。

三千年歴史を偲ぶ茶の香り

一煎の緑茶にひそむ大和心

年目頃からどうにか一人前の接客術を身に付けることができた。しかし商品金銭を仲介とする人と人との触れ合いは仲々微妙なものです。私はどのような商品でも自信をもってお客様に接するが、お客様の方では何かと値段以上の注文をつける。その様な時私の忍耐が足りないためか、つんとした態度がすぐ出てしまう。それでもお買上げいただければお客様が天国に住む仏さまの様に思えるし、注文をつけただけで立ち去るお客様は地獄に住む鬼の様に思える。何か飛躍した考え方の様に思われるでしょうが、自分の仕事に忠実になればなる程この機な気持ちにさせられます。それでも何故これ程までに頭を下げ、お世辞をいって商品を売らねばならないが、一人になると深刻なまでに考えさせられます。しかしいつも最後にはこの仕事は自分に与えられた最上のものであるという気持ちの整理がつきます。

お客様が仏さまとなるか、鬼となるか、すべて自分の心の中、気持ちの中にあると思います。今日も仏さまを求めて接客中です。

法然上人を鑽仰する

寺内大吉

をあげていたのです。三四日後このことを吉田絃二郎先生に話しましたところ、さすが、一宗を統率される方であるといわれたが、私もこの時以来大島先生を尊敬しています。

私は寺に生れ、しかも男は私一人だったので、その寺を継がねばならなかった。その寺を守るべき私がなぜ小説を書くようになったか、私自身にもよく分らない。中学時代はバスケット部に所属し、全国大会で準優勝しました。

その頃の願いは日本の代表選手となりオリンピックに出たかった。しかし卒業間ぎわ胸をわずらいスポーツをやる体ではなくなり、必然的に好きであった小説の方に変わったのではないかと、今に思う。

私はかつて「浄土」の編集を手伝っていた。事務所が増上寺の近くにあったので、よくその付近を通りました。ある時増上寺を通りかかった折、草むらの中に一人の大入道が立っていた。その人は大島徹水先生でした。先生はそこでお経をあげておられた。そこには銅製の首がごろがっていた。それは境内に祭ってあった板垣退助像の首でした。当時は戦争のさなかだったので、各地の自由民権に活躍した人々の像は皆破壊されたが、この像もその一つでした。

先生のいわれるままに私もお経をあげたが、たとえ銅製の首といえどもこのような扱いをしてはならないと、毎日お経

ここでよく考えてみると、私がスポーツをやりたい、小説を書きたいということは寺を継ぎたくないということであつたようです。そこで私はただお念仏を申し、お布施を受けるということだけでなく、何かを求めて大正大学に入学した。私は大学生活五年のところ七年やった。当時は太平洋戦争のさなかであり、軍事教練が大変きびしかった。しかし私は身

体が弱かったため軍事教練を受けることができなかった。そのため二年留年となったのです。

その時に私ははじめて釈尊を知りました。留年の決った春休み気晴らしに手当り仕第読んだ本の中に釈尊の伝記がありました。釈尊は釈迦族の王子として生誕されたのであるが、生来お身体は丈夫でなかったらしい。しかし釈迦族は勇猛な種族であったから、王子である釈尊も部下に連れられてスパルタ訓練を受けられたのである。ところが突然釈尊は訓練を拒否された。御自分の身体が一番大切なものであると悟られた。

周囲の願いをよそに、それから訓練はなされなかった。そして出家後一時は難行苦行されたが、それではいけないと苦行者の一群から一人離れて修行されたという伝記がある。要するに己れを守るためには強い意志がいる。少々みっともなくとも訓練には参加せず、しっかりと我身を守ろうとする態度が釈尊の精神であると思いました。これを我身に比してみれば、落第ということは大変みじめなものであるが、自分の身を考えればなんでもないという点に心の安堵を得たのです。これが釈尊と私の間にできた最初のふれ合いです。そして結局二年落第したが、とにかく人間はみえとか世間体とかに執着して人生にもっとも大切なものを失ないがちです。このよう

に自分の身を守るためには大変な勇気がいる。釈尊は勇猛邁進されたが、決して仏法を強制されてはいない。自分の身を守れ、そして自分のもっともたのしい生活をきずけとされたのです。

少々飛躍の感があるが、この釈尊の教えを忠実に受け継いでいるのが法然上人であると思う。上人の伝記をみると、讃岐に遠流されたがそれに静かに従い、大反抗や勇ましい宗教戦争もなさらなかった。しかし朝廷の命令には従ってはいないものの、上人はお念仏を決して止めてはいない。表面は物静かであるが、その内に秘めるものは非常にたくましい方であったと思う。私自身このような考え方から学校生活の中から覚えたのではなく、自分自身の体験から釈尊や法然上人に近づいたと思っている。そしてこれらのことから何らかの方法で修行せねばならないことを知りました。

寺に生れた私としては寺で修行すべきであるがどうも好きでない。好きな小説の道で修行する方が適していると思い、念仏を唱えるような気持で小説の道に入った。ところがこの道も大変苦しい道で仲々うまくいかないのです。小説らしいものを書きはじめてから実に十七年間あまり、うろろうしていました。その全く書けない時代に、しばしば関西方面に題材を求めて出かけて行った。現在第一線で活躍している人々

も当時は無名の小説家であり、これらの人々との交友を深めるためでもあった。又他の目的は競馬・競輪場に出かけていくことであつた。ある時大阪の岸和田競輪場に行った折、六レース位で金が全てなくなつてしまつた。残っているのは東京へ帰るための三等のキップだけである。東京行の鈍行の出るのは夜の十一時半すぎである。まだ二時すぎであつたから、実に九時間もの間時を過ぎさねばならない。とにかくレースが全部終了するまで競輪場で時を過そうとぼんやりスタンドに座っていた。

そこへ五十がらみの人が話しかけてきた。どこかで見かけた人と思つたが、その時は誰であるか分らなかつた。あとでその人が法然上人に似ていると気づき、上人その人であると信じるようになった。何故ならその人が千円札を一枚くれたからです。丁度地獄で仏様に会つたようなものです。この功德を受けた金で買った百円の券が当り一万四千円になった。早速先程の人に御礼旁々かえそうと競輪場をくまなく探したが法然上人に似ている人には会えなかつた。その日のあとのレースも又当り、結局二時間前には一銭の金も持っていなかつた私が、競輪場を出る時には七万余円の金がふところにあつたのです。この心のこもつた千円札がこんなに大きなものとなるとは私も気がつかなかつた。だからあの人が法然上人

であると信じる様になつたのです。生きていく世の中には必ずこのような法然上人がどこかにいてくれるという安心さが出てきた。

こうして余分なことをしつつ小説を書いてきたが、現在に至つてみれば大変つらいことがある反面心あたたまること多々あつた。

ところで私は今月のはじめ十六才になる長男を亡くしました。この子が死ぬ時変な体験をしました。息子は死ぬ前の晩から発熱し、四十度位であつた。翌日すぐ入院させた。私も息子の容態が心配でつきっきりでいた。おかげで午後から容態はよくなり熱も下り出した。医者の話では良くなる一方で二三日中には退院できるといふので、私はその夜ある座談会に出かけた。その出席者の中にひさしぶりに会つた人がいたので、その人と飲みに行つた。その折、不思議でならないのは、普段時計をもっていない私が隣りにいた友人の腕時計をちょっと見た。その記憶は実にあざやかなに残っている。何故見たのか分らないが、夜の十二時十四五分前を指していた。まさにこの時刻に息子が亡くなつていたのである。つまり古い言い方をすれば飲んだくれている父親のところへ息子は別れのあいさつにやつて来たのです。あるいは僕は死ぬのだと告げに来たのかも知れません。私はそれに気づかなかつ

た。これが永遠の別れとなったが、ここに私は又新たな宗教的体験を得ました。

子供を失なった悲しみは大変なものです。生れた時から段々成長していく子供のことを些細に見ているから、自分の子供のことは100%知っているのです、その悲しみは100%のしかかってくる。この大きな悲しみを私はたまたま体験したが、世の中にはこのようなことが沢山あると思います。このような中で息子は宗教がいかに大切なものであるかを私に教えてくれました。この人間社会は科学がどんどん発達し、次々と未知の世界が我々のものとなる反面、一つだけ分らないものがある。それは我々がどこから生れて来、どこへ去って死んでいくかである。この実に不可解な事実に向ってこの問題を解明せんとするのが宗教であり、仏教なのである。

ことに西方極楽浄土という死んだ後でも絶対に来世があると思じられた法然上人は実にすばらしい点に着想されたと思う。何政なら私が体験した息子の死で、あの時あの瞬間に消えてしまったとは思いたくない。どこかに生きていてほしい肉体はなくなってしまうても、私の知っている息子は必らず生きているということを信じたい。永遠に西方極楽浄土に生きていると信じたい。身近かな人の死によってふりかかる苦しみ悲しみは残された人々にであり、この残された人々が地

獄に残されるのである。死んだ人は必らず安穩に極楽に行っているに相違ない。この点を法然上人ははっきりとつかんだと思う次第です。そして念仏を唱えるということは死んだ人が極楽へ行くためにするのではなく、残された人々が地獄のような苦しみから救われんがために唱えるのではないでしようか。従って死後のいろいろの法事は残された人々の迷いを救わんがため、悲しみと苦しみから立直れずウロウロしている氣持を救うために行なうものです。寺院が檀家をもつ、これは一つの集団であるから不幸も次々と出来る、この度ごとにお経を聞き互いに誦えることによって修行し、人生とは何か死とは何かということを考えることであると思う。

私は子供を失なったが寺族のためその悲しみをもっていくところが無い。齒をくいしばって苦しい悲しみを味いました。が結局お念仏以外にないことが分った。はじめは小説の道に進むのだと自悟していた私ですが年がゆくに従って法然上人や浄土思想というものが好きになり、又それらに近づきつつあると思うようになりました。人生何事もなく過ごされば宗教など必要ではない。何らかの形で我々に苦しい悲しみはのしかかってきます。その人生の無情を乗りこえるために法然上人のいろいろの強い暖かいことばあるいは行ないがあることを知り心の糧として下さい。(京都家政学園講演要旨)

特集 浄土 三十周年記念京都大会

初夏の風薫る古都京都で四月二十二日、法然上人鑽仰会の創立三十周年を祝う諸行事が、華やかに行われた。去年十一月東京の上野精養軒での会に引き続いての祝賀行事であった。

しかし、この会は、京都の有志同人が発起人となられ、鑽仰会の三十周年を祝うと共に、今後の発展を期する為、本会を激励する会とすることで催されたもので、われわれとしては感謝と感激に満ちたものであった。その案内は、したがって、次のようなものであった。

拝啓 時下いよいよ御清適の程お慶び申し上げます。

法然上人鑽仰会が、月刊誌「浄土」をはじ

め、いくたの教化「トラクト」を公刊し、更に講演会等を開き法然上人の遺徳宣揚に努力いたしております事は、已に御承知の事と存じます。

この会も創立以来、満三十周年を迎える事となり、これを機会に種々企画を新たにし、一層の鑽仰運動を展開することになりました。

時あたかも、浄土宗開宗八百年を近く迎えることとて、鑽仰運動の展開は、誠に時宜に適したことから、意を強くする次第であります。

就きましては、関西方面の有志相寄り、その運動の推進に協力すると共に、記念会を開き、三十周年を祝し、激励をいたしたいと存じ左記のごとき会を催すこととなりました。

日常御多端の折ながら万障繰り合わせ御出席の程、御案内申し上げます。 敬具

発起人 (五十音順)

大木山知恩寺執事長	板倉了海
浄土宗教学局長	鵜飼光順
總本山知恩院執事長	鵜飼隆玄
仏教大学々長	恵谷隆戒
大本山清浄華院執事長	江藤澄賢
大阪教区長	加藤真瑞
滋賀教区長	小池晃成
大阪教区教化団長	宅見春雄
京都教区教化団長	高橋真了
奈良教区長	中村晃川
奈良教区教化団長	西岡興亮
東山学園長	藤原弘道

家政学園長 三枝樹 正 道
華頂学園長 水 野 隆 樹
京都教区長 八 橋 亮 純
黒谷金戒光明寺執事長 吉 水 俊 成

記

◇講演会

日 時 四月二十二日(金) 一時より

場 所 家政短期大学 大島記念講堂

講題講師 「法然上人を讃仰する」

寺内大吉先生

◇記念パーティー

日 時 四月二十二日(金) 五時より

場 所 京都駅前 ステーションホテル

会 費 千五百円也

お蔭をもつて、二つの会場とも盛会で有意義なものであった。以下、その報告を兼ねて御協力の各位に感謝の意を表したい。

◇講演会

京都仁王門の学政学園は、見違える程立派になり、昔のおもかげはない。幼稚園から短大まで、恰かも学園都市のような観がある。

この学園の大講堂で、作家寺内大吉先生の講演会があった。

此の日は、特に鵜飼光順短大副学長の御協力のもとに、短大一年生の文化講座として開講して頂いた為、大講堂も殆んど一杯であった。一般の聴講者も、長谷川浄華院法主や須賀隆賢先生等多くの来会があり、盛会であった。

安居香山氏の司会で、讃仰会を代表して大



講演中の寺内先生

正大学長佐藤密雄博士の挨拶で始まった。佐藤博士は讃仰会創立以来の経過と現況を話し、今日の講演会の持たれた事に深い感謝の意を表べられた、続いて鵜飼副学長が立って、讃仰会の偉業と、今日の法縁の結ばれた事を喜ぶ意味の言葉があり、引き続いて、別掲のとき寺内先生の講演があった。

特にその中では、家政学園の元園長であった大島徹水上人との因縁話から始まり、先生独特のスポーツ談に満場を魅了した。最後に、近時長男を亡くせられた感懷をしみじみ語られ、一入と感深いものがあった。直木賞を受賞して以来、多忙な先生の出講は、この記念講演を、誠に有意義なものとする事となった。

終って、中村康隆正大学教授が、意義ある記念講演の出来たことについての謝辞があり、午後二時半、閉会した。すがすがしい気分です立ち去って行く聴衆の姿には、何か法然上人の遺徳の輝きが見得るようで、有難かった。

◇記念祝賀パーティー

祝賀パーティーは、京都駅前のステーション



鵜飼教学局長のあいさつ

ホテルでこの日午後五時半より行われた。法然上人讃仰会三十周年祝賀会という大な横額が舞台に飾られ、花の飾りは一段と会場をにぎやかにしていた。此の会の為には、特に高橋良和先生が影の力として、御活躍下さった。お蔭で六十数名の来会者があり、本会として、京都でこの様に盛大な会が持てるとは、思ってもいなかっただけに、感慨一入であった。

長谷川浄華院法主、鵜飼光順教学局長、新谷東京支所長、塚本善隆博士、大橋京都教育

委員等々多士済々で、特に日本に滞在して、寺院生活を実際にやりつつ仏教の實際を研究されているデンマークのマルタ・ボイエル女史が藤吉慈海先生に伴われて来会され、紅一点で花を添えて頂いた事は、感激深かった。会は、高橋良和先生の司会で、来会者が集まられるのを待ちつつ、来賓の寺内大吉先生、讃仰会との因縁話を、二十分程頂いた。そして、六時頃から、パーティが始まった。独特のユーモアと、熟達した言い廻しで、高橋先生は、会のなごやかな雰囲気盛りあげ



長谷川浄山法主による乾杯

ながら、会を進行された。

先ず、發起人を代表して、鵜飼教学局長より、本日の会合を持つに至った経緯を中心とした挨拶があり、続いて、本会を代表して、佐藤密雄博士の謝辞があった。長谷川浄山法主の音頭による乾杯のころは、会も、漸やく盛り上り、初夏の心地よい空気と共に、満堂は祝賀気分一杯になった。

引き続いて、塚本善隆博士、角野達堂先生、大橋教育委員、小笠原鳳瑞師、須賀隆賢氏等が立って、或は会の功業を賞讃し、或は今後の努力を激励された。角野先生の思い出を中心とした、きびしい教示や、小笠原鳳瑞師の佐藤春夫先生の思い出は、特に感銘深いものがあつた。いずれの人々も、浄土を愛し、法然上人の偉徳をしたうが故の同人で、こうした人々が、今この会場に相つとい、膝を交えてなごやかに語り合えた事は、何としても、法然上人のお導きと、深謝するのみである。

来賓のボイエル女史も、藤吉先生の通訳で、偶然、この会に参加出来た喜びを、永々と語られ、日本仏教のよさを、しみじみ味わ

たと感懐深げに語られた。

最後に、新谷支所長の発声で万才が三唱され、佐藤良智博士の閉会を兼ねた謝辞があり散会したのは、もう八時半を過ぎていた。なごやかな会であった為、時の経つのも忘れるといった有様で、しみじみと、こうした会を持った有意義さを知った。これを機会に京都を中心として、益々有縁の人々が増し、本会が発展する事を、切に願って止まない。当日の参会者は、左の方々であった。ここに掲げて、その御協力を謝する次第である。



祝賀会風景

受付



赤木定順 安藤円章 安藤仏具店 飯田信弘
石井俊恭 伊藤真徹 石橋真誠 石井ハツ
上野馨雄 鵜飼光順 江藤澄賢 遠藤随了
恵谷隆戒 大河内良孝 大国忠師 小笠原愿
瑞 大橋俊有 大橋成宏 大西法衣店 角野
達堂 川内知光 河合孝雅 小林忍戒 小池
晃成 佐藤順道 沢田謙照 佐藤心岳 佐藤
密雄 佐藤良智 佐藤行信 佐藤成順 信ヶ
原良文 新谷寛応 須賀隆賢 千賀真順 関
二三男 谷地雄 高橋良和 高橋真了 宅見
春雄 竹中信常 田中竜定 塚本善隆 鶴田
湛泉 寺内大吉 戸川靈俊 豊原成康 豊田
愛山堂 中村康隆 二本松聖順 長谷川善務

長谷川宣丈 藤田説量 藤吉慈海 古川観瑞
藤堂恭俊 本田正義 牧田諦亮 松川嶺純
マルタ・ボイエル 三枝樹隆善 宮林昭彦
諸戸素純 山口真誠 八橋亮純 安居香山
山田昇禅 吉水俊成 (敬称略 五十音順)

追記

以上のように京都における祝賀会は成功裡のなかに行なわれましたが、その反響はただちに関西方面を中心に新入会員の増加となつてあらわれました。この鑽仰会を盛りたてる人々が一段と増したことはこの上なく力強いことと思います。



祝賀会風景

友の請不

—— かけがえのない「浄土」 ——

堂 達 野 角



去る四月下旬、京都で法然上人讃仰会三十周年の記念会合が開かれた。定刻に遅れ末席のテーブルにすわっている私に、司会の高橋良和先生が、とつぜん、テーブルスピーチを指名した。

少々アワをくった。こんな時には、思わず本音をはいてしまうものである。私は頭のとつべんにチラついたものをさらけ出してしまった。

—— 三十年前、京都にある宗門の学校に職を奉じて間もないころだった。外（げ）道の学問をおさめ宗義の深さになじまず、宗門の事情にも通じなかった私に、雑誌『浄土』はなんと素ばらしいものに見えた。若い新進の学者が、さっそうと筆をって、私のような者にも親しめることばで論議を張っている。

じぶんもあんなふうに書いてみたい、とうらやましい思いをした。しかし書ける自信も、書けとすすめてくれる人もなかった。性来小心で引っ込み思案ときているので、どうしようもない。とうとう終始、隆たる『浄土』文筆の発展を、指をくわえて見て過してしまっ

当時の若い論客は、今ではそうそうたる大学者になって、浄土教学を背負っておられる。今盛んに筆をとっている少壮学者は、やがてその後を継ぐことだろう。オレにも書かせろ、積極的に割り込んでくる若い気鋭の士も少なくあるまい。が、なかには、うらなりのヒョウタンみたいに、葉蔭でクスんでいるものもいるかもしれない。できればそんなのを、無理にでも日なたへ引き出し、シリをひっぱたいて筆をとらせてやってほしい。その同志を集める勢いが、つぎの三十年後の『浄土』の実りをく多するだろう！

短い時間のスピーチだったので、ひょっとすると、グチをこぼしたように受け取られたかもしれない。それは部分的に真実である。たしかに書けなかったのは今でも残念であり、うらやましい思いをした記憶はまだ残っている。書く力がなかったのだから仕方がない。

だが、私は私なりに『浄土』から多大の収穫を獲得したから、たいしてグチの種にはしていない。プラス、マイナスしても、たっぷりプラスを頂だいできたのである。そのしだ

いはつぎのごとくである。

× × ×

私が初めて浄土宗義の学問を教わったのは大正大学である。まだ学生時代の昭和初期だった。夏休み中の一カ月ほどの間、宗門が特別講座を大正大学で開講したとき、これに参加した。この講座は、私のように仏教学や浄土学を専門的に学んでいない者のために、開かれたのである。大正大学の学生も、たくさん参加していた。

大島泰信先生、今岡達音先生、阿川貫達先生などに教わった。名前も字も間違っているかもしれないが、その堂々たる風格と熱心な講義ぶりは、なお記憶に残っている。今岡先生を大正大学の学生たちは「タットン」さんと呼んでいた。気骨隆々の宗乗学者というタイプだった。

そのタットン先生に『選択集』を教わった。『南無といっぱ』なんていう読み方をされるのが、おかしかった。とっつきにくくもあった。それでも、講義が進むにしたがい、そう難解とは感じなくなった。阿川先生には、たしか浄土教理史を習ったと覚えている。講義

のあと阿川先生に、何かくだらぬ質問をしかけたことがある。思いがけぬほど親切、ていねいに応答してくださったのに、強く打たれた。

この講座だけでは不十分だと、その後もその上積みをした。というよりは、させられたという方が当たっている。ともかくこうしているうちに大学をおえ、宗門の学校に籍をおくことになった。

今の仏教大学は前身、仏教専門学校である。もっぱら、宗門の坊さん養成を目的とする学校だった。当然、教科の主流は宗学、仏教学、教授にはその道の一流学者がそろい、学生も宗門の僧籍をもつものばかりだった。

私は大いにとまどった。教師間の日常の会話にも、宗学、仏教学の熟語が織とまじるというふん囲気である。学問の話となると、一そうだった。とても私の簡易詰め込み知識では歯が立たない。たいそうヒケ目を感じたことである。これではならじと先師の祖述に取り組みもした。だが難渋、なかなか寄せつけてくだらない。

そんな時に『浄土』が目の前に現われた。

当時の『浄土』は、まことに発らつとして魅力的であつた。今はそうではないというわけではないが、当時ほつ興しつゝあつた宗教ジャーナリズムの波に乗つたのであろう。私はそれに飛びついた。私の浅い宗学、仏教学の知識をいたわってくれたからである。

毎号を読みふけた、などといったはオーバーである。これはと見つけたものを、一念に読ませてもらった。その成果はあつたらしい。かつては難渋近ずき難かつた先師たちの著述に、少しずつ接近できるような気がしたからである。それとともに、だんだん宗門の空気にも親しめるようになった。一挙兩得とはこれである。

本当をいうと私は、他人にはあまり『浄土』を愛読している振りを見せなかつた。こっそり読んでいた。じぶんの弱味をのぞかれる気持ちがしたからだろう。だから、寄稿したい、などとは言ひ出せなかつたのかもしれない。

それにしても、一挙兩得の成果には、満足すべきものがあつた。私は改めて、難解難渋な祖師、先輩の著述に、払うべき尊敬を怠つていたことを、自ら反省したのである。

x x x

『浄土』に親しんだお蔭でたくさんの方の諸先生を知り得た。知己といってもこちらがしただけで、向こうさまはご存じではない。しかし宗門内に親しい先輩や友人をもたない私にとって『浄土』で結ばれた知己は、得がたく尊とかった。じっさいに足下に接し得たのは、佐藤良智先生ただ一人であった、といつてよい。例外的に出会ひに恵まれたのであろう。

真野正順先生は、りっぱなお方だった。もつとも、写真と文章から、じぶんが勝手に知遇を得たことにしているだけのことである。『浄土』の総率としてのその文章には、熱気と気魄がみなぎっていた。先生はどうやら、私のような者に、特に呼びかけておられるように受けとれた。磨きのかかった人柄にちがいない、と私はひそかに確信していた。

佐藤賢順先生も印象的だった。哲学めいた理づめの文章だったが、姿勢は端正、何事にも真正面から取り組む風の方だった。そのほか、年順は多少ズレるかもしれないが、中村弁康先生、竹中信常先生、藤田寛雅先生、中

村康隆先生、藤井実応先生などの名前が思い浮かぶ。今でも何かの機会に名前に接し、『浄土』に結びつけて記憶をたどることがある。なにしろ「活字になった名前」しか知らない方々ばかりである。それでも親しく知遇を得たことになったとは、ありがたいことである。

真相をぶちまけると、一つには、佐藤密雄先生のお蔭である。当時先生は、仏教専門学校の教授であった。私は先生との会話のはしりから、それぞれの先生の風ほうをくみ取ることができた。拝ひの機縁に浴しなくともよい紹介者の見えない紹介にあずかれたのである。

お経に『不請の友』ということばがある。こんなことを書いていこううち、その意味がわかるような気がし出した。

雑誌『浄土』は、法然上人が指し示された真実の『浄土』であるのかもしれない。私にとってかけがえのない大切な『浄土』の成長を祈ってやまない。

新会員紹介

島根県大田市波根町五六四	加藤 勤助
都下府中市紅葉丘二の四一	北川 有光
兵庫県西宮市高座町二〇〇	古我 富士
大阪府布施市彌刀源氏丘五九	中井 信次郎
京都市上京区榎木町千本東入	中井 俊雄
京都市下京区新町通正面上ル	矢口 浩悦庵
福井県福井市杉影町八	森田 昭
福井県武生市姫川町	水上 ひな代
福井県鯖江市五郎丸町	堀 望
福井県鯖江市水落村沢山	福岡 進
福井県鯖江市五郎丸町	齋藤 孝雄

業界一の銅瓦・銅板葺一般・模様葺・別製金具一式私の先祖の宮及び寺、六角堂、納骨堂及び鐘楼の銅材一式手間代も寄進、神様仏様へ報恩の奉仕故安く良く、他所には出来ない何代も研究せる卓越せる最高技術最低価請負業者も悔なき様。御相談無料。

東京都文京区春日1丁目九の二八

銅瓦葺協会
相談役顧問
設計及監督

石 黒 工 業

電話 (812) 一五五

念仏生活に音楽を

―出発した仏教音楽研究所―

安居 香山

知恩院では、近代的な布教研究の一環として、仏教音楽の発展と普及のことを企画中であったが、この種、その最初の試みとして、仏教音楽研究所を開設することとなり、去る四月二十三日その開所式が盛大に行われた。

建物そのものは、山内の既設建物を利用したものであるが、講堂にそなえつけられたパイプオルガンは、その偉容を部屋一杯に輝かせていた。

鵜飼隆玄執事長を、所長とし、藤原薫、中西和夫、小川隆宏各氏が研究員となって、鋭意その研究と普及につとめることになったが就任以来、積極的に祖山発展の為、その実行力をフルに發揮している鵜飼執事長のことで、その発展が大いに期待されている。

従来、知恩院では、毎月、御影堂で、御忌

当日、音楽法要が行われ、仏教大学、家政、華頂、東山、吉水各高等学校の学生達による荘厳な儀式が、大いにその成果をあげ、若い人々に、音楽を通じての仏教理解に貢献していることは、周知のことである。こうしたものを、更によりよいものにして行く為にも、音楽研究所の開設は、誠に意義あるものと言わねばならない。

長い伝統と歴史を持つ仏教であるからと言って、時代の推移をよそにして、その上にあぐらをかいていては、時代に置き去られてし

まうことは、今更ここでいうまでもないことである。法要一つにしても、荘厳さばかりがすべてではないのであり、本当に現代人がその中に居て、浄土を感じ、自分のものとしての念仏を申し得る環境をつくり上げて行かねばならない。音楽法要も、いうならば、その一つの試みに外ならぬ。

近代化するばかりが能ではないが、いろいろと努力して試みている中に、必ずそれなりのもものが生成されて行くものである。その意味で、仏教音楽研究所の出発は、遅まきながら、積極的な浄土布教への出発として、喜びに堪えない所である。

他宗などでは、己にいろいろと研究されているが、特に新興宗教などでは、伝統にとらわれず、音楽法要で儀式化され、現代人にも、こたわりなくその信仰に入れる場を作っている。PL教団などは、そのよい例である。又創価学会などは、民音という組織をつくり、先ず音楽から信者を引きつけて行く布教を考えている。試み方は、いろいろあるとしてもそうした努力を試みずしては、一步も前進がないことを、この際知らねばならない。



音楽研究所構堂正面仏壇

(お 経 の 話) その六

— 無量寿経 (下) —

現世の修善こそ尊し

村 瀬 秀 雄

人はなぜ念仏しない

極楽ではすべてのものが金銀七宝でつくられ、美しく輝いています。常に微妙な音楽が流れ、香り高いそよ風がふいています。人々が欲すれば、食物も衣服も自由に得られます。また人々は優れた功德と智慧をもっています。このように浄土は微妙な安楽の国であって、清浄なところであります。

ここにおいて經典は大きな疑問を投げかけています。即ち

「なにぞつとめて喜をなさざる」

と、人は何故お念仏を称えて往生しようと思わないのであるか、というのであります。そ

して続いて、こう説いています。

「道を念ずれば自然なり。あらわにして上
下なし。洞達して辺際なし。よろしくおの
の勤精進して、つとめてみずからこれを求む
べし」

即ち、お念仏の道を信ずれば、自然の道理
によって往生できます。しかもこれは上のも
のも。下のものも、尊いものも、卑しいもの
も、なんらの区別がありません。あらゆるも
のに透徹して、その力はいたるところに満ち
ていて、厭界がありません。人々は自づから努
力精進して、浄土往生の道を求めなければな
りません。

更に經典は、往生する者の少ないことを指摘しています。

「往き易うして而も人なし。そのくに逆違
せず、自然のひくところなり。何ぞ世事をす
てて勤行して道徳を求めざる。」

極楽に往生するための容易な道があるにか
かわらず、極楽に往く人はまことに僅かであ
ります。極楽は誰でもが差引されることなく
間違いなく往けるところであります。それな
のに何うして人々は、世間の雑事をすてて念
仏を称えないのでしょうか。他力の功德の法
を求めようとしないのでしょうか。

これには勿論理由があつてのこととて、
「しかるに世人薄俗にして、共に不急の事
を争う」

という実情によるものなのです。人々は人
情が薄く、不正を行い、物質的な精神的な欲
望に明け暮れしているばかりで、生死の一大
事を少しも考えようとしなないためでありま
す。

人は煩惱に苦しむ

ここにおいて經典は、煩惱に苦しんでいる
人のすがたの説明に入ります。煩惱というの

は貪り怒り愚かさの三つのことであります。

あくまで貪りたいという欲望は、尊い者も卑しい者も富めるものも貧しいものも、すべての老若男女が持っています。自らが貪るために、自ら憂い悩み苦しんでいます。

次に怒りは、憎み嫉む心から生ずるもので物惜しみをして互いに助け合わないからおこるのです。一度争いの心が起きて怒りを発すると、これが次第に大きくなって怨みとなります。しかも一度相手に対する怒りをもてばその怒りは心から消ゆることがないでしょう

そして第三の愚さについて、經典はこう説いています。その第一は、善いことを行えば善い結果を得るという因果応報を信じないこととであります。第二には生老病死は誰でも免れることができないばかりでなく、老若の順すら守られないという生死無常の法則を信じないことであります。第三には現世の快樂のみに耽けて愛欲に溺れ、道德を守らないことであります。第四には恩愛の情や恩慕の念にかられて、常に憂い心を痛ませていることであります。第五には上のものも下のものも、貧しい人も富める人も、みな同様に世の営み

にのみ忙しく、道理にかなった生活ができないことであります。そして最後にこう記しています。

「愛欲榮華はつねに保つべからず、皆まさに別離すべし。樂しむべきものなし」

愛欲榮華とは五欲、つまり財欲と物質欲と飲食と名譽欲と睡眠欲との五つの欲望がさかんなこととあります。これらの世間的な欲望は、かりに得られたとしても永続し難いものであるというのであります。徒って五欲を追ひ、これを得れば次にはこれを失う苦しみを体験しなければなりません。五欲によって得られたものは、決して真の樂しみではありません。

「人世愛欲の中にありて、独り生じ独り死し独り去り独り来る。行いに相当して苦樂の所に至り趣く。身自らこれをうく。代る者あることなし」

まさに自分の苦惱は自分でかりとらねばなりません。

五惡のすがた

經典は更に説き進んで、現世における大きな惡業について説きます。これが五惡段とい

われる所であります。即ち

「衆生を教化して五惡を捨てしめ、五痛を去らしめ、五燒を離れしめ、その意を降化して五善を持して、その福德度世長寿泥寿の道をえせしむ」

とあります。五德を犯すことによって罰せられて五痛となり、未來世で苦報を受けるから五燒となります。こうした衆生の惡心を降伏し教化することによって、五善を行わせ、五善を行うことによって、現世では良い果報を受けることができ、來世では極樂に往生することができ、長い壽命と悟りとを得ることができます。それにはまず惡業の内容を知らねばなりません。

さて、その第一の惡は殺生であります。強いものが弱いものを圧伏させようとするものであります。そのためにお互同士は傷害し合つてまで相手を降おうとし、遂には殺害にまでに及ぶことがあります。

第二の惡は偷盜であります。孝順慈愛の義理を守らず、国の法規や慣習にしたがわず、おごり高ぶつて、財をむさばることとあります。このような人の心の中には眞実さがありません。

ところから、互に悪計をもってだまし合い、言葉では美辞をつらねても、内心は嫉んでいいます。他人の利益をみて、これを欲して盗心をいなくようになります。自分の放逸な心が他人にまで害を及ぼすことになります。

第三の悪は邪淫であります。自分の妻を厭い嫌って、他に婦人と道ならぬ関係を結ぶことであります。この人は邪淫のために常に欸悶し、愛欲のために心が乱れ、自分の財産を費して、しかも仕事に励むことをしません。

あくまで快樂にふけるために、他人の財産をねらうようになり、一家親族のものに憂いと悩みを以て苦しめることになります。

第四の悪は妄語であります。二枚舌をつかい、悪口をいい、嘘言や誠のない言葉を吐くことであります。このような人は父母に孝行行をせず、師や先輩を軽蔑し、友人に信義なく誠実なく、尊大にかまえて無暗に威勢を張り、他人を軽んずるようになります。

第五の悪は飲酒であります。怠けて仕事に精を出さず、酒にふけり、美食をこのみ、飲食に節度がなく、我がままな放蕩三昧の生活をするのであります。そのために家族は困

窮し、家人が諫めると逆に反目します。他人の苦しみを知らず、他人を見ては憎み、そして、妬みます。

現世の修善こそ尊し

このように經典は、五悪の内容を説いてから、その結果の恐ろしさを教え、更に五善を行えと勧めています。しかも現世における修善は、仏国土において修善するよりも何万倍という大きな功德があるといえます。即ち「正心正意にして斎戒浄清なること一日一夜すれば、無量寿国にあつて善をなすこと百歳するに勝れたり。ゆえいかな。彼の仏の国土は無為自然にして、みな衆善を積んで毛髪のは無為自然にして、ここに於て善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土において善をなすこと千歳するに勝れたり」

と説いています。即ち「毒を飲み苦を食うような生活」をしている現世であるからこそ、その中で僅かでもよいから善を修さなくてはならぬというのであります。

このような仏さまの教化がもしゆきわたることができたならば、その土地においては

「天下和順し日月清明なり。風雨ときを以

てして災勵おこらず、國中ゆたかに民やすんじて兵尤もちいることなし。徳を崇め仁を興こして務めて礼讓を修す」

という平和な世界がづくり出されることになります。仏さまの教えが実行されたならば即ちお念仏を称える生活がゆきわたったならばこうした理想の世界が形成されるというのであります。經典の説法はいよいよ終りになりました。その結論として次の一節があります。「彼の仏の名号を聞くことを得ることあつて、歡喜踊躍して乃至一念せんに、まさに知るべし。この人は大利を得たりとす。則ち是れ無上の功德を是足す。この故に改勤たという大火三千六千世界に充滿することありとも、かならず当にこれを過ぎて是の經法を聞いて歡喜信樂し、受持し誦誦し説の如く修行すべし」法然上人のお詞に「經に一たび名号をとらふに、大利を得とす。又すなはち無上の功德を得ととけり。いかにいはんや念々相續せんをや。しかれば善根なければとて、念仏往生をうたがうべからず」とあるのも、同じことを示されたものであります。

伝道

田中 祥雄



四月といえば宗祖法然上人の遺徳を偲ぶ御忌会である。今年も例年のように、増上寺と知恩院の御忌会に大正大学浄土宗仏教青年会布教団として出席させていただいた。祖山には四月二十一日夜出発して、二十二日、二十三日、二十四日の三日間、山門前、黒門と御某所で伝導させていただいた。団員は、和田岡村、白幡、小俣、大谷、野中、安藤の七君と私の八人である。勢至堂に宿泊させていただき、朝は勸行、掃除、午前九時から四時まで布教時間とした。仏教大学と協同であったが、我々のつたない話しても立ち止まって、耳をかしていただける人の多いことには驚いた。しかし多勢の観光客は全く聞き流して、ガイドの解説しか耳には入らない。この解説だけでも知恩院の方でされたら、布教伝導の効果は一層、向上するのではないかと考えられるのである。だからこうした現実には、長々とした話は効果がない。短い話の中の一句でも耳にはさんでいただければと思い、身近な、しかも簡単な自分達の体を通した話しがつけたようである。それだけに苦勞も多くよい勉強であった。近年本会を作ったパンフレ

ットも三千部程用意したが二日間に全て配布してしまった。このパンフレットの効果も大きかった。法然上人の写真を載せた表面が特に受けて「昨日これをいただいたのですか近くに欲しいといわる方があるのもう三部程いただけないでしょうか。」などと配布係の野中君等大喜していた。祖山での布教伝導はやはり全国浄土宗寺院の中心であるだけにやりがいがある。岡村君は「信機信法」うったえたし、白幡君は「ブッダンサラナンガッチャーミー」「和讃」などで若い女性を立ち止めさせていた。和田君の独特な性格は大いにもてて、今もなお手紙がくるという。

仏教大学との交歓会も行なった。こうした伝導を更に内容を考え各地に出たいというのが我々の考えであるが、今回も知恩院当局の方々に多大な援助を終わってからこそ成功できたのである。厚く御礼申し上げると共に、宗内学徒の連体意識の向上をと考える次第である。それにしても布教所で大先輩、先輩諸氏が激励に来ていただいた。これ程力強いことはないしこうした活動が近年少しずつ認められてきていること程うれしい事はない。

私にも不動心があつた

上 田 純 明



私は昨年十一月再入院した。以来、肺炎

自分の六十年の生涯をいとおしみました。

の余波が、やはり前からの左肺に影響して、

その上、その去年末から今年三月へかけて、

微熱が上下し、何としても、おさまらず、

大変だったのです。前に申し上げたような心

十二月、一月、二月は、全く不快でしたし

細い気分の明暮れの頃、私の両隣の病室は、

やはり、化学療法が行き届いたというもの

一人はインテリで報道関係の仕事の人、一人

の、弱い人は死んで行くので、私も時々

は、銀座に娘さんがバーを経営しているとい

この頃の朝日新聞の井上靖の小説「化石」

う私ぐらいの年のおばあさんですが、実は、

のように遠くではあるが、「死」というも

このインテリ氏は弁舌爽やかで創価学会の人

のを体験として覗いたような「孤独のどん

で、入院以来既に何人か、入信の手引きをし

底」という時間を持ちました。やはり、

た由、おばあさんは、私が一昨年第一期入院

「自分は、このまま少しずつ悪くなって死

している時の患者で、やはり一度退院した出

んで行くのかも知れん」と胸を撫でては、

戻り患者ですが、以前は、とてもとてもよほ

よほと悲しそうに下ばかり向いて、這うように歩いてる人だったのに、どうでしょう私が再入院して見ると顔、も薄化粧をして、きちんとした容姿で、サッサッと風を切つて歩くくらいの快さ、「おばあさん、随分よくなられたんですね」、と言ったら「創価学会入信のおかげですよ」、とにこにこして、時折おいしい果物などおすそわけしてくれる。おばあさんは、もう三月までに三度大石寺へも団参に加わって、有り難かっていました。お詣りしてくると、一層体が軽くなるんですって。

週に一回は、どこかの室で、お話会があるらしい、九時の消燈時間まで、びつしり話し合って楽しそうです。これまでは私も構いせんし、人様のこと故、何の差障りもないのですけど、時折、私の隣室が座談会会場になった時などは、全く安静どころが、暴風よりも私に取っては心の荒波を立てるようで、その頃から、時折り不眠症にかかったりし初めたのです。不眠の原因はそれだけではありません、夜中にでもほそ

ほそと読経の声が聞えたり、夜明け四時ごろに聞えたり、そうやって来ると、そういうことのない日でも、ひょっとして今夕もまたそうかも知れんという不安が起って、何となく私の点も寝るみたいなんです。

御承知のように、昨今は創価学会も、折伏などと無理強いに乗り込んで来ないのですが、やんわりやんわりと、入信の幸わせを教えるのです。

何事もなくてさえ、病弱、「死」をかい間見るような真剣な時、薬にでもすがりたような病人である時、この騒ぎは、私が宗教的無知だったら、とくに引かかる筈でした。

私は、あのおばあさんの元気を蘇らせたものは何だろう、どういう雰囲気か、言葉か、無知だから、すらすらと受け入れられて、おばあさんには有効だったのかも知れない。それにしても、あのファイトを何が与えたのだろう。仏教でもキリスト教でもそんな速効薬があるだろうか。まあ、一応は創価学会も偉いもんだなあと思いました。

た。(おばあさんは、フルフルとよくなつて三月中旬退院して行きました)。

私は、おばあさんが退院して少し静かになつて、ほっとしてから再応考えることが起つたのです。——私は、あらしのように隣室から心をかき乱されたのですけど、不思議に、心の底まで動揺しなかったということです。なぜ私は、こんなにもドッシリ構えとられるのだろう。宗教的な者の精神に関しては、少しも動揺しなかった。私は浄土宗の寺で育つて、お仏飯で大きくなった人間です。丹羽文雄か誰でしたか何かに書いていたように「小さい時の躰付けって大事なものだ。の、様、という心は、どんなになつても身につき纏っている」というような意味だったと思います。が、全く、私はその通りだと、これは誰にでもあるかも知れないことですけど、私に取っては六十年の生涯に、はじめての大きな深刻な体験だったのです。信仰なんて聞かれたら何にもないと言わざるを得ないグータラベ—です。だのに、こればかりは確固不動心なのです。

そこで再応、私は考えを進めました。こういう仏教的環境は、実は少くとも日本中にみなぎっているのだ。私は今年はじめて除夜の鐘を唯独り、ぼつねんと鎌倉の病室で、テレビやラジオでなく、生の音で、鎌倉五山や光明寺の鐘などを涙ぐましく聞いたのでしたが、あれだけでも仏教は大したものだ、葬式坊主でも何とでも言われようが、やはり伽藍仏教の中に、何かが細々ながら生き続いている、それは何でしょう。

「歴史の積み重ね」、そうです。歴史の積み重ねだと私の思考を結論付けました。長い歴史を持つものは、意味なくして存在するのではない、それだけの意義があるからこそ殺されないのだ。それいい、それでいい、私は一層素直にベットの所で合掌して、あちこちの寺々を心に描きながら冥目しました。おかげで三月中旬以来すっかり元気を取り戻して、今朝は鎌倉の空は飽くまで青く、若葉の風は快く、コジューケイ頻りに啼く庭前が、清々しいので、つい長しやべりをしてしまいました。



◇仏教について、やさしくお話してください。

日本の文化と仏教との関係は、非常に深い因縁があります。欽明天皇の御代に中国から渡来してから、およそ千四百年にもなります。その間、仏教はいろいろ形の上では変わってきましたが、終始、日本の国の発展に大きく役立ってきました。

わたしたちが、日本のどの地方に行っても必ずお寺を見かけます。また、日常使っている言葉の中にも、仏教からでたものが沢山あります。

まず、さかのぼって、仏教を開かれたお釈

迦さまについて、少しお話しいたしましょう。お釈迦さまは、いまから二千五百年ほど前に、インドのヒマラヤ山の南麓カピラヴツの町にお生まれになりました。お父さまはシュドダーナ王といい、カピラヴツ城の首長として人徳の豊かな方であり、お母さまはマヤー夫人と申しました。

お釈迦さまの幼名はゴータマ・シッタルタといい、なに不自由のない生活を送っていたのですが、生老病死の人生の現実遭遇して煩悶し、ついに意を決して、お城をすてて修行の道に入ったのでした。

当時のインドでは、バラモン教をはじめ、色々の宗教がありました。いずれも苦行をすることによって、魂が清められるという教えでありましたが。ゴータマは、それに納得することができず、六年にわたる修行のすえに、自己の心の深奥を探索して、ついにお悟りを開かれたと伝えられています。

そこで、釈迦族出身の尊者として、「釈尊」と味ばれるようになりました。わたしたちが「お釈迦さま」と呼びして敬い親しんでいるのは、お釈迦さまが、一個の人間として生

れながら、あらゆる困難をのりこえて、仏陀（さとれるもの）となられたという事実からわたしたちも、自分たちの努力によって人格の完成に到達できるのだという、自覚と理想をもつことができるからです。

◇仏教の根本のおしえについて

仏教というと、なにか奥深くむずかしい教えのみのように考えられておりますが、その根本は決して、それほどむずかしいものではありません。

人間が今日を、どのように生きて行くかということを深く考え、自他の人格完成に向けて修行していこうという教えなのです。この世の中は、いまま昔も、とかく暮しにくいものです。国と国との問題、労資の問題、対人関係など、息づまりそうな葛藤が際限なくくりひろげられているのです。そのような世の中にあって、人びとが正しく生きぬいていくためには、どのように考え、どのように行動していいたらよいのでしょうか。

この問題について、お釈迦さまのおさとりになったことは、すべてを語っています。

「この世にある一切のものは、すべて刻々と移り変っている」(諸行無常)「この世にあるものは一つとして、自分だけの力によって存在しているものはない。すべてのものは常に因縁によって、互に働きあっている」(諸法無我)ということ、その根本の原理

は、宇宙人生を貫ぬいているのです。お釈迦さまの示された、この「法」(真理)に随順し、自己光成一と努力することによって、こうした、お釈迦さまとおなじ最高の人格者となることが、災ととり(涅槃寂靜)の境地に連する仏教徒としての普通のねがいで

あります。わたしたちは、仏教をまなぶことによって家庭に、職場に、街角に、明るい雰囲気と、道理にかなった生活、たくましい生命の息吹きを送りたいとおもいます。(宮林)

現代語訳 歎 仏 偈

—その一—

吉 田 定 久

世自在王仏を歎え奉る詩

原文

訳文

(1)光顔巍巍

(1)世自在王の

威初無極

威光ある

如是焰明

姿に等しき

無与等者

者あらず、

訳意

(1)世自在王仏よ、王の…重厚で…御威光に

溢れていらす御姿は、実に尊い極みでございます。王に同じ姿をした者は、他に

誰一人もいないでしょう。

(2)日月摩尼

(2)摩尼の宝珠も

珠光焰輝

日も月も

皆悉隠蔽

光りを隠して

猶若聚墨

墨のごと、

(2)摩尼の宝珠も日も月も、王に対しは、皆、

光りを隠して墨と同様であります。なぜで

しょうか、王の御威光は何時でも、何処で

も、誰をでも照らすのに、日は昼だけ、月

は夜だけ、宝珠は其の場所だけに輝くに過

ぎないからであります。

(3)如来容顔

(3)王の御顔は

超世無倫

麗しく

正覺大音

覺りの御声

響流十方

世に高し、

(3)王の麗しい御声や御姿は、俗世間を超越

しておりますので、並ぶ者がいないのは

当然でございます。又、王の御悟りから

来る教化の御声は、世界の隅々(十方)

にまで高く響いて、人々に強い感銘を与

えておられます。

(4)戒聞精進

(4)教を聞きて

之味智恵

行を積み、

威徳無侶

希なる徳を

殊勝希有

備えらる、

(4)というのも…王は普て数々の教を御聞き

になり、それを只営御実行なさいまして、

希に見る殊勝な徳を備えられたからです。

一揆と河三と康家

尊 本 黒



泉 湛 田 鶴

ますます跳梁をほしいままにしていづ果てるとも計り知れない家中の紛糾を、一挙に終熄せしめるためには、一揆の本拠である佐崎の砦を焼き払うにしくはないと決断した家康は、忍びに巧な甲賀者の深沢九八郎、青山虎之助の兩名を招いて、

「手段を構じて上宮寺に忍び込み、砦に火を放ち、それを合図に本拠を壊滅してくれようぞ」

と、秘かに命じた。

十四日の夜のこと、夜襲を企てた家康は時刻を計って手勢を率い上宮寺の近辺に身をひそめて、何時でも攻撃に出られる態勢をととのえながら寒夜の冷をこらえ、火の上るのを今やおそしと待ち構えていた。

「今夜こそ、一揆の奴泉に、目に物見せてくれようぞ」

誰れの顔にも、並々ならぬ決意の色が現われていた。

ところが、火の手が仲々あがらなかった。

家康は、待ちくたびれたように石川数正に声をかけた。

「数正、おそいの？」

「ハイ、未だだ火の手があがらぬとは、不思議でございまする」

「まさか、敵に裏切ることはあるまいに」夜が更けて寒冷が身にしみて来たが、火の手は一向に挙らなかった。時刻も移ったこととて、しびれを切らした家康等は、手を空しうして岡崎城え引きあげざるを得なかった。火があがらなかった理由は、かうであった。首尾よく寺中に忍び込んだ深沢等は、砦に枯柴をうす高く積んで將に火を放たうとした途端、夜廻りの者に発見されてしまったのであった。

「おのれくせ者、それ逃すな」

隊伍を組んで夜廻りをしていた太田党は、白刃を抜きつらねて二人を取りまいて来た。深沢等は勇敢にも多勢を相手に戦っていたが、多勢に無勢、所詮かなわず二人ともあわれなぶり斬りにされてしまった。

あけて十五日の未明、三反畑というところに兩名の首を獄門に梟け終ると、

「仏敵の最後のあわれな姿を見よ」

口々にあざけりののしって、数人の一揆の武士が引き上げようとしていた。

この時、たまたま上宮寺の動勢の偵察に來た。

ていた渡り村の鳥井党の鳥井久兵衛の家臣、小谷甚左右門がこれを眺めむかつ腹を立て、

「憎き奴原の仕業よな」

真つしぐらに馳せよると、刀を抜いて忽ち

二人を其の場に切り伏せてしまった。

小谷の勢におそれをなしたのか、残る連中は一散に逃げ出してしまった。小谷は彼等の跡を尚も追ったが、砦の中に逃げ込むと門を閉ざしてしまった。

「穢き者共の有様ぞ」

門を閉ざされて仕方なく、小谷は砦の内えののしり怒鳴った。

「ほさくな、おのれ、渡り村え押しよせて鳥井党をのこらず討ち取ってくれようぞ」

鸚鵡返しに、砦の中でひしめき騒ぐ声が聞えた。

驚いて小谷は渡り村に帰ると、鳥井久衛門にこのことを告げた。

小谷に二人も討たれたこととて、一揆が仕返しに打って出て来ることは必定と思った鳥井党では、かねて申合せの通り近くの桑子の妙原寺の早や鐘について急を岡崎城え知らし

相図の早や鐘を聞いた家康は、昨夜夜襲のためつれて行った精兵は休養のため残し置き

今日は何程のことがあらうかと、僅かな雑兵を率いて渡り村えと急いだ。

毀子坂の辺りに來た時、いつも家康の出馬してくることを知り抜いていたので、待ち伏せていた一揆は、黒い魂となつて襲つて來た。

家康は「いざござんなれ」と、矢つぎ早やに矢を放った。日頃練えた腕は確かで見事に適中し、四人五人とバタバタ射倒された。一揆勢は一時恐れをなして退いたが、機を見て攻勢に転じて來た。

家康は白刃をきらめかして、旋風のようにかけめぐっていたが、今日率いて來たのは軽卒のこととて、次第は手兵は斬りたてられ惨々にいためられて來た。

この有様に、

「今日こそ、家康の息の根をとめてくれようぞ」

叛徒の群は、家康一人を目ざして剣をそろえて來た。

身の危険を感じた家康は馬の首を立て直す

と、只一騎、真一文字に桑子の妙源寺を目ざして駒を走らせた。一揆は尚も執權に家康を追つて來た。

妙源にたどり着くと、寺に待機していた安藤、高木、長坂、神谷等、

「殿を守れ」

と、襲い来る一揆を防ぎ戦った。

妙源寺の広い寺内に駒を入れた時、家康はほつとした。

家康は、がらんとした人氣のない本堂に入つて仏像前に端座したが、さすがの家康もどうしていいのか途方にくれた氣持で、未だじりじりしておちつかないのか、指をしきりに噛んでいた。

やがて、我れ知らず仏の端嚴な相好を仰いで視線をこらして、暫くじつと見つめていた。本尊は堂内を圧するような莊嚴さであつた。

仏の相好を仰いでいると、ぞうつと冷いものが背中を走り、自分など吹き飛んでしまいそんな小さな存在としか、思えてならなくなつて來た。

それもそのはず、専修寺派の巨利、妙源寺

の本尊、阿弥陀如来は、平安朝の初期、比叡山の恵心僧都源信が、一刀三礼しながら精魂こめて彫まれた具予であった。

幼い時から長い人質生活を余義なく送って来た家康に取っては、人生は決して順風滞帆の日ばかりではない。人生は決して甘いものではないと、心の髓まで知らされて来ていたので、骨肉相喰む戦国の乱世のこと故、自分の家中が二つに割れて主君に逆うのも無理ないかも知れない。これが我が身に神仏から課せられた大きな試練と、じっと歯を食いしばってこらえて来たが、いつまでもこのまま一揆との敢斗をつづけてよいものかと、反省されて来たことであろう。いや、早急に一揆を懼伏することもなし得ない己が力の余りの弱さに、切齒したことであろう。のみならず、こんな窮地にまで追いつめられて、自分の一命まで危くなるとは何としたことか、而もそんな危急な時がこの前にもあったではないかと、身の毛のよだつ思いをしたことであろう。

この正月のこと、上和田の大久保党と、本多正信を将とする一揆の戦の時の我が身の危うかったことが回想されたに違いない。

一揆側の伏兵に逢って敗北を喫し、単騎逃れようとする、更に一揆側は家康を包囲してしまった。家康は文字通り獅子奮迅の勢で戦いからうじて包囲を突破することが出来たので、ともかく菅生の満性寺（専修寺派）へ逃げ込んだのであった。

この時、満性寺の寺僧寂玄は、寺中の十二坊の僧を初め門前の者共を狩り集めて河原揆を固め一揆を撃退したため、一命を完うすることが出来たのであった。

主君と家臣が戦うなどとは、何と愚なことか、而も同じ家中の者同志が、父子兄弟一族がそれぞれ敵味方と分れて血みどろになって戦っているなどは、まるで保元平治の乱の再現ではないかと、暗澹たる気持にならざるを得なかったであろう。この呪われた争をこれ以上つづけていいものか、いや何としても早く終らしめたいものである。それにしても早や精も根もつき果てようとしている。すると、かつての日、大樹寺の登誓天室上人から与えられた厭離穢土、欣求浄土の旗の文字が、くつきり目の前に浮んで来た。弥陀の尊像にちっと瞳をこらして祈念していると、

「起て！ 起て家康！」と夢幻のうちに告を蒙いた思いがした。

「穢きを厭うて、浄きを欣う」「そうだ、ここで碎けてはならぬ」

かうした錯雑な気持で家康は、莊嚴な仏像に対し、この世の汚濁を清め給え、円満なる解決を与え給えと、切なる祈念を込めて掌を合わさずにはいられたかったことであろう。おそらくはせっぱつまった気持で、五体投地して一揆退散と領民安泰を、敬虔に祈ったのではあるまいか。

さればこそ一揆平定後、永祿八年或は九年とも云われているが、三月廿二日のこと、妙源寺之親書を送り、この具象を寺の寺え寄進するのではなく、家康自身の生涯の守り本尊として譲り受けた旨を切実に述べて、寺に懇望したのである。

かうしてこの仏像を岡崎城に請じて、家康の護持仏として持仏堂に奉安されていたが、かの関ヶ原合戦の終った翌慶長六年十一月、江戸の芝増上寺に安置され、世に黒本尊と称され尊ばれるに至ったのである。

無媒隨録

須藤 隆仙

昨年の夏、真宗大谷派北海道教務所から頼まれて、札幌で講演をした。そのときの講師が私と金子大栄先生との二人であった。

金子大栄先生といえば、大谷大学の名誉教授で、曾我量深先生と並ぶ大谷派教学界の重鎮であり、八十歳を越えた今日、いまなお豊饒として、法談に著述に余日なく同信同行の師表として活躍している著名のお方である。

そのような偉い方と同席するのは恐縮でもあったが、反面、力量を試してみたいという風情がないでもなかった。いまにして思えば全く恥しい不遜な考えであった。

控室で会ったとき、一目先生の相貌に接するや、私はたちまち、いいよのない感激をど

うすることもできなかった。なよなよとして虚弱な感じの一老人なのだが、それでいてこのひと一人のために室全体がバツと明るくなっているようであった。まさしくそれは王者の風格とでもいえるものであった。

側に一人の老婦人がいて、この人がたった一人の従者であった。その婦人が奥様なのか、それとも信者の一人なのか、私には質す必要もなかった。

もう十年近くもまえのことであろうか。汽車の中で私は異様な人物と同席したことがある。ガッチリとして軍人を思わせるような体軀で、物を射るような眼をしている。しかもその付近に中年の男女が席をとっており、それらが一つのグループであることは容易に知れた。体格のいいこの人は、そのグループの長であるらしく、いろいろな人たちが交互にこの人のところにやってきて、真剣になにかを語っているのである。

聞くともなしにその会話が耳に入ってきたのであるが、一瞬私はハツとした。「成仏がどうの」「信仰がどうの」ということを話し

合っているではないか。

だんだん聞いていくうちに、その人たちが、いまをときめく某新興宗教の信者たちの一団であることがわかったのである。

さまざまな話の中に「人間が成仏するときはどこからするのですか」という質問があった。長とおほしき巨体の男は、「エー」「ア——」といって盛んに即答に困っているようであったが、「手からだな、手からさきに成仏するのだよ」というのであった。

私はおかしかった。吹きだしそうなのをがまんしたので、私の顔がゆがんだのか、巨体の男は恐しい顔をして私をにらんだ。私にはそれがいっそうおかしかった。

信心といったようなことを思い起すとき、私はときおりこの巨体な人のことを思い出す。信じたつもりでいるときに、人間は子供のうにたわいがないのであろう。多量の信者を引きつれていても、それはそのへんのガキ大将のようなものである。

それに反して、信というものの極限が回入せられたとき、人はたとい一人の老婦人をより従えておらなくとも、王者なのであろう。

繪	連
話	続

みんなの法然さま

— 靈感奇瑞のこと —

高橋良和

さしえ 小林健造

ある宗教の人はいう。宗教は奇蹟を起こすと、奇蹟は宗教であるともいうようである。まことに宗教を履きちがえた人のことばである。

宗教は決して奇蹟ではないのであるが、信仰の心がすすんでくると、まるで人間わざでないようなことをやりあげる自信が湧いてくるし、その人間わざを乗り越えるような大胆なことも起こるのである。すべてが信心の極地によって生まれてくることなのである。

まことに法然上人もそのお一人であって、上人の日々のくらしの上には実に不思議なことがよく起こったのである。それはいわゆる常人を越えた上人の人格を、一つのたとえ

ばなしを通してあらわすことであって、その一つ一つの深い意味を味うと、尚一層法然上人の偉大な人がらにふれることになるのである。

たとえばこんなばなしがある。

法然上人が比叡山の黒谷において、華嚴經(けごんぎょう)というお経の講義をしていたときに、机の上に小さな蛇がいたのである。

弟子の法蓮坊というのが、それをみつけて、ちりとりに入れて投げすててかえってみると、どうであろうか、またさっきの蛇がまたもとの机の上にいるのである。「これはおかしい」と早速法然上人に申しあげると、法然上人は、





これは華嚴經を守護してくれる竜神である
といって、それを捨てることをやめさせたのである。

これは上人の華嚴經のおはなしに竜神も聞き入って救われたことをあらわすはなしの一つである。

またこんなはなしもある。

法然上人があるとき夢をみたのである。

大きな山があつて、その峰が高くそびえていて西の方に広
くのびている。その山のふもとに大きな河が流れているので
ある。

その水はあおく、その河原は長くつづいてつきるところを
しらないほど茫々たる景色のところである。

この景色のところに大空に紫色の雲がひとひらとびきたつ
て法然上人のところにやってくるのであるが、そのとたん雲
のなかから、なんともいわれない光が放たれて、その光のな
かから、孔雀、鸚鵡などのいろいろな珍らしい鳥がとび出て
大空に散るようにとびまわるかと思うと、河原におりてはた
のしそうに散歩するありさまである。

たのしい音楽も聞こえたことであろう。百鳥（ももどり）
のさえずる声ものどかであつたろうと思うのであるが、その
なかに紫色の雲がひろがって、この山のあたりをすっぽりと
かくしてしまうほどになったときに、その雲のなかから一人

の僧があらわれて、法然上人の前にやってきたのである。

おどろいた法然上人は、その僧の姿をよくみると、腰より上は墨染の衣をまといっているが、腰から下は金色の姿なのである。法然上人はおどろいて、

「あなたはどなたさまでございますか。」

と聞くと、その僧はにこやかなまなざしを上人にむけながら

「わたしは唐の国の善導大師である。」

とこたえたのである。更に法然上人は、

「どういうわけでここにこられたのであるか。」

とたずねると、

「あなたが日本の国で南無阿弥陀仏のおしえをひろめているので、それを實際この眼でみるためにここにあらわれたのである。」

といってその姿を消してしまったのである。

夢はここで終わっているが、さて、この唐の善導大師がここにあらわれたということは、明らかに法然上人のおしえが唐の国の善導大師のおしえによって出来あがっていることの証拠であり、あの比叡山の図書室でみた。

一心に仏の名をとなえたと必ず救われるというあのことを中国でひろめたのは善導大師であったので、この夢のなか

での二人の会見は、法然上人と善導大師のゆかりをあらわす一つの方法でもあるし、むつかしい学問的なつながりをこまごまと述べるより、この夢物語りで善導大師と法然上人とは時代的に距離があっても、そのおしえは非常に接近していることをあらわすためのものである。

そこで法然上人はこのときの夢のなかの善導大師の姿を一つの絵にあらわして、半金色の聖者という、半分金色の衣を着た善導大師の姿をつくったのである。

浄土宗の仏壇には、この半分金色の善導大師の姿を絵像なり、彫刻なりにして、脇壇にまつるようになっているのであるから、それぞれ吾が家の仏壇の扉をあけて、この像をおがんでもらいたいのである。

こうした靈感は法然上人にかぎって数多くあるのである。

その一つ一つを味ってみると、いづれも法然上人の心の移りゆく姿を一つの具体的な事像にして世人にわかりやすく語ったものであって、そのなかでも九条兼実（かねざね）公の屋敷で説法したときに、法然上人の身体がまるで宙にういたように、そして蓮華の花びらをふむように、その上、頭のまわりから光が放っているようにみえたということもあるが、これとても上人の偉大な人間をあらわすための表現であると思う。

「法語をいただく」

聖道門の諸経は先に滅す。故に経道滅尽という。浄土門のこの経ひとり留まる。故に止住百歳という。まさに知るべし。聖道は機縁浅薄にして、浄土は機縁深厚なり。

(選択念仏本願集)

釈尊は無量素経を説き終って、最後にこう申されました。

「世の中が末法になって、」智慧もなく持戒もないようになると、他の經典に示されているような解脱の道は行いたくも行えなくなるであろう。しかし仏さまはそれでも一切の衆生を救いたいという慈悲の心があって、この心を満足させるものは、ただ一つこの経――無量素経――で示した念仏法門があるのみである。念仏法門はすべての解脱の道が閉ざされても、必ず世を利益すること百歳に及ぶであろう。従って将来、衆生がこの經典を読んで念仏をするならば、衆生の願いに応じて、浄土に往生することができ」

つまり聖道門の經典は、そこに深遠な法門が説かれているにしても、現在の世の中にはこれを体得できる者がいないというのです。

これでは經典があってもないのと同様のことになるわけで、このことを、経道滅尽と申します。しかし仏さまの慈悲心は、念仏法門だけを後に残して、衆生の救われる道を示されました。ここに百歳というのは、形容詞であって長い期間を示し、いわば永遠にという意味であります。

この一節は、特留此至（ひとりこの経を留める）といって、無量寿経の説法の一つの特徴になっていきます。従って法然上人は、この一節を引用して、聖道門の經典は、人々にとって縁の遠いものであり、浄土門の教えは今の時の凡夫に最も因縁が深厚であると申されたわけであります。

しかも經典に経道滅尽とある句に対して、聖道門の諸経は先に滅すると明言されました。ただし聖道門の經典は消えてなくなるわけではありませんから、形なり字句なりだけがあっても、これをその通りに実践し体得する者が極く稀にしかいなくなれば、その經典は

滅し去ったのと同じであるといわれたことです。聖道門の經典と浄土門の經典とを比較して、その普遍性、その永遠性を説かれたのであります。

こうした法語をいただくのには、こちら側にはそれだけの心の準備がなくてはなりません。その第一は誠実な心、正直な心であります。人生をみつめ、真面目に考え、自分の実態を知ろうとする心がなければなりません。こうなれば当然のことに深く自分を反省することになります。これが第二の準備であります。自分は賢明であり、自分の考えることは正しく、自分の力で人生を築くのであると信じている人は数多いと思います。事実またその通りであろうと思います。しかし一度生死の問題、無常の実態に直面したならば、自分の能力の限界を思い知らされることでありましょう。誰でもが超人でもなければ宇宙人でもないのです。この点からいかに学問を究めても、慈悲心があっても、誰もが凡夫であるに過ぎません。反省と自覚があって初めて經典を信ずる心になるのです。そして第三の準備は經典を素直にいただく心であります

罪とがを除いて幸福を得る徳

念 珠

毎日くりかえされる生活の中で、いつも、さわやかな快適なときばかりではない。重苦しさを感ずるような、さえない一日もある。人間の生活のなかでの感情も、起伏のおおい一定しない不安定なものである。

お互に、善きことをしようと心がけながらも、罪をかさねて生きている場合が多い。それは、世間の法を犯すということではない。人間の本性をきわめて反省してみるととき罪ふかき、わが身をおもうのである。

信仰の生活は、おのれの罪ふかきに胸ふるわせ、いいしれない不安のなかより出発する。信仰の生活は、ただに観念的な遊戯ではない。あすの命もわからぬ、現に生き、生活している。この身、この心が、本当に安心して、人生をつきすすんでゆける力を、支えを感じとることに、信仰の生活がある。

それは、もっとも具体的なかたちを通して身についてゆくものである。信は莊嚴より、という言葉は、只に外見

上のかざりを意味するのではない。まことの形ちを通して真実のところにふれるのである。

わたしたちは、きよめられた、み仏さまのみ前に詣でるとき、威儀として、身につけるものに、まず第一に、念珠がある。珠が百八ある数珠とか、浄土宗独特の日課数珠などがある。

人間には、知らず知らずにつくれる罪を百八かぞえて煩惱という。そのまよい煩惱を滅し、心きよく豊かに、しかも散乱しやすい心をしっかりと信ぶことを、数珠はおしえてくれる。

むかし、お念仏の信者が、毎日称える念仏の数をかぞえ、道業の増進のために作られたのが、浄土宗の二連の日課数珠である。知恵をめぐらしてお念仏にはげみ、生きるよろこびを味いとした、妙好人の人たちの生きた信仰の生活がまことに尊く感じられる。

つねに手に念珠をもつとき、その功德に四つあると説かれている。一、お念仏のたすけとなる徳、二、罪を滅して幸福を得るの徳、三、よき友を得て、正しい眼を開くの徳、四、心散乱せざるの徳。



編集後記

▽南ベトナムの緊迫した政情不安は困ったものである。かつて大正大学へ留学し、仏教学を学び、希望に胸ふくらませて祖国ベトナムへ帰国したはずのトム・ザック師の戦火のなかでの彼の胸中を察する時、心痛む思いがする。早く平和の訪れる日を念じたい。

▽この頃、浄土の読者の中

で、特に一般在俗の方で非常に熱心な会員がふえている。是非信仰座談会・講演会を月々開いて欲しい。浄土読者百万人倍加運動の展開をしよう。などといろいろのご希望をお寄せいただいている。読者の声の欄もそのあらわれである。尊い声きほんとうの力としていきたいものです。

▽東西で催された創立三十周年記念行事は、いくたの反響をよび、創立当初にま

つわる因縁をあらためて認識したり、将来に対する激励がよせられている。

会仏信仰は過去のものでなく、現在よりむしろ将来ひろまっていくなものである。浄土の発展を期したい。

▽ご好評を博していた藤井実応師の浄土信仰問答、師のご都合によりしばらく休ませてくださいます。誌上をもちまして、同師のご健斗に感謝いたします。

「浄土」講読規定

一部定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十一年五月二十五日 印刷

昭和四十一年六月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

△新刊の御案内▽

川内知光編

生きるための断片

（定価）B6判 二八四頁
送料 四〇〇円
七〇〇円

1. 生きるということ……2. 憧れの心……
3. 仏はつねに……4. ただひたすらに

推薦のことば

小林大巖浄土宗務総長

教化資料といたしましても、類例の少ない良い資料
恵谷隆成仏教大学長

人間形成に志す人、布教伝道に従事する人、良き社会
教養人として人生を全うせんとする人に是非とも

中外日報

伝道揭示にもってこい

発行所

仏教大学通信教育部

京都市北区千本北大路上ル

浄土トラクト

ものいう石	大正大学教授 竹中 信常著	新書判 150P	価 150円 〒 40円
諸仏の戒め	村瀬 秀雄著	B6判 4P	価 5円 〒 10円
四季の寺まいり	大正教授 安居 香山著	新書判 20P	価 25円 〒 10円
—浄土宗の年中行事—			
経本浄土宗檀信徒のおつとめ	村瀬 秀雄編	価 90円	〒 20円
選択集私解	大正教授 竹中 信常著	新書判 120P	価 120円 〒 30円
一枚起請文をめぐる	村瀬 秀雄著	新書判 102P	価 120円 〒 30円
真理のはなたば	大正教授 佐藤 良智著	新書判	価 70円 〒 20円
ご法語のしおり 葵ぐさ	村瀬 秀雄著	B6判 16P	価 15円 〒 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に
（多数申込みには）
割引いたします

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (262) 5944
振替 東京 82187